

kaneko art gallery

オープニング展 - III

2020.8.14 - 8.31

アドリアン・リース

(Adriaan Rees)

アドリアン・リース (Adriaan Rees)



「Landscape w/  
mouse, tree」

2007年

陶、青磁(celadon)

30.0 × 21.0 × 16.0 cm



「Landscape with  
the King」

2007年

陶、銀彩(silver)

25.0 × 24.0 × 17.0 cm

As a child, I was always making drawings. Around 12 years old, I went to a very special artist school. There I found ceramics.

It changed my life for ever.

After 16 years old, I wanted to prove that I had good brains to learn and went to a high education middle school and after that I wanted to be a Physical Therapist.

I am very interested in a human body.

After my study, I went to Africa, to find out if I wanted to work there in Ghana.

I had so difficult time, got malaria and came back. After that, I started to work as a Physical Therapist in The Netherlands.

After 3,5 years work, my father died.

I was healing people but could not help my own father……

That triggered me.

I wanted to do something I always wanted to do, and always did, but now as a real professional.

The stopped my job, my relationship and left my own house.

I started again.

I went to the best art school in the country, for 5 years education in sculpture and ceramics.

After my art school, I never worked as a Physical Therapist again and was from 1991 a full time artist.

Adriaan Rees

子供の頃、いつも絵を描いていました。12歳の頃、私はとても特殊な芸術家のための学校に通いました。そこで私は陶の作品とはじめて出会いました。

それが私の人生を、大きく変え、その影響はその後もずっと続いていくことになったのです。

16歳を過ぎると、私は自分が高等教育を受けるに足る力があることを証明し、そして理学療法士になりたいと思いました。

私は以前からずっと、人体に興味が非常にあります。

その勉強ののち、私はガーナで働きたいかどうかを確かめるためにアフリカに行きました。

私はとても苦労し、マラリアにかかって戻ってきました。

その後、オランダで理学療法士として働き始めました。3～5年働いた後、父が亡くなりました。私は人々を癒していたが、自分の父親を助けることはできなかった……

それが大きな転機となりました。

私は自分がいつもやりたいことをやってきたと思っていましたが、今度は本当のプロフェッショナルになるべきだと思いました。

私は私の仕事、そして仕事での人間関係を辞め、私の家を出ました。

私は、もう一度スタートを切ろうとしたのです。

私は国内でもっとも優れた美術学校に通い、彫刻と陶芸の教育を5年間受けました。

美術学校を終えたあと、私は二度と理学療法士として働くことはありませんでした。そして1991年からはすべての時間をアーティストとしての時間に使い、アーティストとして生きていくことになったのです。

アドリアン・リース

アドリアン・リース (Adriaan Rees)



「Golden Cutie 3」

2007年

陶、金彩(gold)

17.0 × 11.0 × 9.0 cm



「From the Book  
of Dreams 1」

2015年

磁器

陶器(天宝土/Tianbao clay)

26.0 × 20.0 × 20.0 cm

Some of my works have a thin layer of real gold.  
In ceramics, gold can be used in different ways.  
In my works, I made in China, I used the way of Ionization.  
The already fired objects of ceramics will be put in a special factory in a sort of closed box, not a kiln.  
In this box, they make an electric ionic field with plus and minus.  
The gold will be put in the ionic field and turns around quickly, finding its way on the object in a very beautiful nice way.  
It sticks and stays on the surface.  
Before this treatment the objects must be very clean, without any fat parts.  
For the silver, they use the same way.

In other situations, I also might use gold or silver to paint, this is in a totally different way!

In my studio in Jingdezhen, I normally use porcelain. Porcelain was found more than 1000 years ago in Jingdezhen.  
Sometimes, I like to use the normal local clay. One of these normal clay kinds is : Tianbao clay. This is no porcelain, but also very strong and can be also fired high, at 1320 to 1360 Degrees Celsius.  
This clay has a more natural earth like color.

Adriaan Rees

私の作品のいくつかは、本物の金の薄い層を持っています。  
陶磁器の制作においては、金はさまざまな方法で使用されます。  
私の作品では、中国においてイオン化(電離)の方法を用いて制作を行ないました。  
一度焼かれた陶磁器は、窯ではなく、工房においてある特殊な閉じた箱に入れられます。  
この箱の中で、焼かれた陶磁器はプラスとマイナスの電磁波に囲まれます。  
金はその中に入れられると、非常に素早く、そして非常に美しく素晴らしい方法で、中に置かれている陶磁器の方に自らの進むべき道を見つけます。そしてその表面に定着するのです。  
この繊細な作業の前に、置かれる陶磁器は油脂成分の全くない、非常にきれいな状態にしておかなければなりません。これは銀の場合も同様です。

他の方法としては、金や銀を使ってペイントすることもあります、これはまったく別の方法になります！

景德鎮(中国)の私のスタジオでは、基本的には磁器を用いて作品を制作しています。磁器の制作方法は景德鎮で1000年以上前に発見されたものです。  
私は現地のノーマルな粘土を使うこともあります。これらの粘土の1つに「天堡土(粘土)」と呼ぶものがあります。この粘土を用いた作品は、磁器ではないものの、摂氏1320~1360度の高温で焼成できるので、非常に丈夫な仕上がりになります。  
この粘土は、より自然な地球のような色をしています。

アドリアン・リース

アドリアン・リース (Adriaan Rees)



「Wall piece with  
grip, colours」

2007年

陶、金彩(gold)

25.0 × 30.0 × 6.0 cm



「Cutie 2」

2007年

陶、青磁(celadon)

15.0 × 11.0 × 10.0 cm

”The relationship between humour and criticism”. The work of Adriaan Rees often reminds me of this. The motif of the face appears frequently in his work. Each of his works has an aesthetic and unique taste, but what I feel consistently is his unique criticism in each expression. That is difficult to express with just the words ”cute” or ”funny”.

Although it is not clear what he is aiming at, I personally feel strongly that for us living in modern society, this can be an opportunity to reflect on our own way of life, the way society is, and the way we interact with the global environment and nature, etc.

The works that show them so much can sometimes make them less interested, but in his work, they seem to lie beneath the aesthetic value of the works themselves. I have never asked him about this. However, even if the artist didn't have that intent, if his works have such a possibility, it can be said that they are worth it to me, the viewer.

In any case, it is clear that this artist's works have a depth that is not straightforward.

The way of understanding and enjoying his works may vary from person to person, but each of them is a meaningful dialogue with the artist.

He is one of the artists that I would like you to savor and enjoy.

kaneko art gallery - Taro KANEKO

「ユーモアと批評との関係性」。アドリアン・リースの作品を見ていると、そんなことを想起することがしばしばある。彼の制作する作品には顔のようなモチーフがたびたび登場する。それらどの作品にも美的かつユニークな味わいがあるが、一貫して感じるのは「かわいい」あるいは「面白い」と言った言葉だけでは表現し難い、その各々の表情に込めた彼独特の批判精神のようなものである。

それが何に向けたものかは定かではないが、現代社会に生きるわれわれにとって、それが自らの生き方や社会のあり方、あるいは地球環境や自然とのかかわり方・・・等々を振り返らせる一つの契機になりうるものであるということは、個人的には強く感じるどころである。

それらがあまり前面に出た作品は、かえってそのことに対する興味を失わせることがあるが、彼の作品においては、それらは作品それ自体の美的価値の奥に潜んでいるような気がしている。作家自身にそのことを尋ねたことはない。だが例え作家にその意図がなかったとしても、私にとって彼の作品がそのような可能性を持つものであるのならば、それは私という一人の鑑賞者にとってはその価値が十分にあると言えるだろう。

いずれにしても、この作家の作品には一筋縄ではいかない奥行きがあることは確かだ。受け取り方は人それぞれ、鑑賞者によって感じることも楽しみ方も異なってくるとは思うが、そのどれもが意味のある作家との対話であると思う。

ぜひじっくりと味わいながら楽しんでいただきたい作家の一人である。

kaneko art gallery 金子太郎